

『栄花物語』富岡本の成立背景

小島 明子

はじめに

従来『栄花物語』の諸本は「古本系統」「流布本系統」「異本系統」の三系統であるとされてきたが、近年、中村成里氏によって新たに学習院大学文学部日本語日本文学科本が紹介された。この学習院本は第四の系統本と見なされるものであることが認められ、『栄花物語』伝本研究全体に大きな見直しが求められることとなっている。

こうした中、稿者は「異本系統」に着目して研究を進めてきた。他系統の本文が正編三十巻、続編十巻からなるのに対し、「異本系統」は続編十巻を欠く改修本とされるものである。三十巻の完本が現存するのは富岡甲本・乙本のみで、富岡甲本は鎌倉時代後期から南北朝期の写、乙本はそれより時代が下ると考えられるもので、共通の祖本が想定されている。^(注1)

これまでの稿者の調査によって、富岡本では、藤原道長・頼通に関わる増補が多く、しかも道長の後継者として頼通が称賛され、かつまた道長・頼通が春宮（のちの後朱雀天皇）に入侍する禎子内親王を懇切に後見するという傾向が、他本にまして強調されるという特徴を有することが指摘できた。^(注2) さらには、

道長子女を網羅的に列举してゆく増補、逆に道長子女を際立たせるべくなされた道長と疎遠な人物の描写の削除および書き換えなどの改修方向も抽出している。^(注3)

そうした富岡本の改修時期については、夙に松村博司氏が二段階と捉えていた。^(注4) 第二次改修の時期は、『千載和歌集』が本文の改修の資料として用いられていることから、同集の序文が成り（文治三年）、卷子本が奏覧された翌文治四年（一一八八）以降とするもので、ここには異論はない。これに対して大きな書き換えが生じた第一次改修の時期を、後冷泉天皇の御代（一一四五―一〇六八）と松村氏は考えていた（以下、本稿で単に改修と言う場合は、この第一次改修をさす）。しかし当該期は、禎子内親王と後朱雀天皇の間に生まれた尊仁親王が、頼通に圧迫される不遇の春宮時代と重なることから、富岡本の改修内容と齟齬が大きい。むしろ、治暦四年（一一〇六八）に尊仁が後三条天皇として登極、延久三年（一一七一）にその皇子である春宮貞仁親王に摂関家師実が娘を入侍させて以降の方が相応する、というのが前稿で述べた稿者の見解である。^(注5)

本稿では上述の点に関してさらに考察を加えたい。富岡本の改修時期をより詳しく検討し、同時にそれがなされた歴史的な

背景を明らかにするのが本稿の目指すところである。

一 続編第一部の検討

富岡本の改修の時期について考える手がかりを得るには、続編にあたる巻三十一―四十との比較が重要になろう。続編は富岡本にはなく、ここに注目して富岡本との距離を測ってゆく。比較にあたっては、「古本系統」で、かつ『栄花物語』の代表的本文とされてきた梅沢本を用いるが、取り合わせ本である梅沢本の本文は、続編の巻々では「流布本系統」の西本願寺本と同系統であることが、近年、久保木秀夫氏によって証^(注5)されている。

なお続編は、巻三十一―三十七の第一部と巻三十八―四十の第二部に分けられ、それぞれ別の作者によって成立年代を異にして書かれたとみるのが一般的である。ただし、それ以上の絞り込みは難しく、続編第一部は最終記事の治暦四年(一〇六八)以降の成立、また第二部については最終記事の寛治六年(一〇九二)以降の成立とするのが現状である。

順次、続編第一部より検討するが、巻三十七の末尾は、以下のようなやや不穏な記事で結ばれていることにまずは着目したい(本文の引用は梅沢本による^(注6))。

①巻三十七「二六」[頼通と東宮の仲]

よのかはるほとのことゝも、なく、にはかにうちの人おほしめす事のみいてきたることこそあやしけれ。後冷泉院

のすゑのよにはうち殿いりゐさせ給て、世のさたもせさせ給はす。春宮と御中あしうおはしましければ、そのほと御事とも、かきにくうわつらはしくて、えつくらさりけるなめりとぞ、人申し。春宮とは後三条院の御事也。

この箇所について近年の研究においては、福長進氏が、「対象化しづらい、対象との距離をはかりかねる事象であったことを、編者はもう一人の自己(「人」)を分沁し、それに代弁させている」としている^(注7)。一方、加藤静子氏はその論考で、学習院本がこの跋文とみられる箇所を持たないことから考察を展開し、「(学習院本が：稿者注) 整えて本文を削除したわけではなく、本来的に跋文のような文章がなかった」「後世の享受の段階で付されたか」との見解を提示している^(注8)。

ただ、第一部にはこの①の記事以外にも頼通と春宮尊仁親王との不和に類する記事を指摘し得る。尊仁の母后禎子内親王についての記事がそれである。

禎子内親王は、万寿四年(一〇二七)十五歳で春宮敦良親王に入侍し、良子内親王・娟子内親王、そして尊仁親王を生んでいたのであるが、夫君の敦良が即位し後朱雀天皇となった翌年の長元十年(一〇三七)一月、頼通はそこに養女・姫子を入内させた。同年の三月には、女御であった姫子の中宮に、中宮であった禎子は皇后に転上することとなり、立后の宣旨を受けるため一旦宮中より退出する。ところが、その後の両者は明暗を分けてゆくことを、続編第一部は数箇所描出する。

②卷三十四（三）「禎子内親王とその皇子女の境遇」

中宮はほとくなく、いらせ給ぬ。皇后宮はいらせ給へとあれと、いかにおほしめすにか、いらせ給はす。

この②は、立后後まもなく宮中に戻った中宮姫子とそうしなかった皇后宮禎子を並記し、禎子はあたかも自分自身の意志によつて宮中に戻らなかったように描いていることがわかる。以下も姫子と禎子の対比記事である。

③卷三十四（一〇）「姫子女王と禎子内親王の暮しぶり」

中宮には前栽あはせ、菊合などせさせ給て、おかしき事おほかり。皇后宮にはよろつをよそにきかせ給て、おほしめしなけく事かきりなし。

④卷三十四（一六）「中宮姫子女王の懷妊と、禎子内親王の苦惱」

中宮はた、ならすならせ給て、奏せさせ給。上達部よろこひ申なとし給ふ。いみしうめてたし。皇后宮には、齋宮伊せにくたらせ給、齋院は本院になと、みなよそくにおはします。よき人もなをくるしけにおはします。

④に関連しては、卷三十三（一二）に、後朱雀天皇の即位に伴つて禎子腹の良子内親王は齋宮に、娟子内親王は齋院に卜定されるという噂があったことが簡単に記されていた。その後の記事が④であり、禎子の不如意な境遇に言及する。京に近い齋院は別として、遠く伊勢に赴く齋宮の生活は華やかなものとは言い難い。後朱雀天皇から四代遡つてみると、花山天皇の御代には済子女王（章明親女王）、一条天皇の御代には恭子女王（為平

親女王）、三条天皇の御代には当子内親王（三条皇女）、後一条天皇の御代には嫛子女王（具平親女王）が選ばれている。女王が多く、当子内親王のみが当代の皇女であるが、当子の母后は小一条流の藤原城子であり、御堂流の女性ではない。すなわち齋宮には皇室内の傍系の女性が選ばれる傾向にあると言うことができ、内親王であり、皇后である禎子を母としながらも良子内親王が如何に位置づけられていたかが自ずと示されている。齋院・齋宮の決定は純粋な籤引きではあり得ず、頼通の圧力が見え隠れし、続編第一部もそれを意識して書き留めていると思われるのである。

そして続編第一部には、禎子が自分とその所生の皇子女たちを追い込んでゆく頼通の動きを抑えることができなかった夫君の後朱雀天皇に対し不満を抱いていた、とする以下の記載も存する。

⑤卷三十六（五）「後朱雀院崩御」

「皇后宮にはゆるさぬものにおほしたれと、なからん世にはおほしいつる事おほからんものを」とた、この冬、申させ給し、おほしいつるにも……

死期が迫る後朱雀院が残した言葉で、皇后宮禎子が後朱雀院を許してはいなかったであろうことを語らせ、禎子の心情を付度させてもいる。

ただ、こうした一連の描写は、あくまで続編第一部が描き出そうとした禎子像であることを見落してはなるまい。第一部は、姫子と禎子を対比的に描き、そこに優劣をつけるという構成を

とつていたのであった。

しかも、禎子は時代が少しずれる、もう一人の后とも対比されている。それは、後一条天皇を父に、道長女の威子を母にもつ章子内親王である。章子は従兄弟にあたる後冷泉天皇の中宮となつたのであるが、そこには頼通が実の女である寛子を内入させ、やがて寛子は皇后に冊立されている。一見すれば、章子内親王の立場は、禎子内親王とまったく同様と見なされるのであるが、その描写は双方で大きく異なる。

⑥ 卷三十六（二五）「寛子の立后」

殿もこの御方の御事をは、かたしけなく心くるしう思ひきこえさせ給て、ありしにもかはる事なくつかうまつらせ給頼通の女の寛子が立后しても、頼通の中宮章子内親王に対する扱いは以前と変わることはなかつたとするのがこの⑥である。

⑦ 卷三十六（四五）「天皇と后妃たちの仲」

御かた／＼まいらせ給へれと、さらに御らんしいれす、ものしき御けしきにもあらず、よその事におはしめして、あてにけたかく、きこしめしいる、御けしきにもあらねは、いと、あはれにありかたく思申させ給て、なに事もまつこの御方の御事をおはしめしたり。

また⑦では章子内親王を「あてにけたかく」と性格づけ、夫君・後冷泉天皇に他の女性たちが入内しても、それを一向に気にすることもないとその麗質を描く。そしてそれ故に、頼通も自身の女の寛子よりも、章子内親王を一段上位に扱ったとするのである。

こうした章子内親王記事は禎子内親王の記事を呼び起こすものであり、今度は章子と禎子の間に優劣をつけるという構図になっている。そしてここまで読み解いてみると、続編第一部は、孤立する禎子内親王の立場が禎子自身の心根によつてもたらされている、と読ませるような仕掛けをなしていることが見えてくるのであった。

一方、禎子所生の尊仁親王に目を向けると、父後朱雀天皇が自身の崩御後に微妙な立場となることが予想される二宮の尊仁親王を氣遣うという箇所が見出せる。

⑧ 卷三十六（四）「後朱雀天皇、後冷泉天皇に譲位」

二宮いかにせんすらんと、うち／＼にもおほせられける。故院と、女院も関白殿もおなし事におはしまし、たに、我とちこそよかりしか、すえ／＼の人／＼はよからぬ事をいひいて、おのつからなる事もありしに、ましてこれは御はらもかはらせ給、御うしろみもかはらせ給へは、いかにとおほしめすなるへし。

後朱雀天皇の一宮・後冷泉天皇は、母が頼通同母妹の嬉子であり、その母はすでに薨去しているものの、後見は盤石である。思い廻らすと兄弟の宮と言えば、後一条天皇と後朱雀天皇自身もこれに該当するが、二人は同母兄弟で後見も全く同一である。にもかかわらず「おのつからなる事」もあつたことが想起され、まして異母兄の後冷泉天皇との間では尊仁親王はいかなるものになるか、という至極当然な父帝の心配が描かれるのであった。これは先の禎子の場合と違って、尊仁の評価を下げるべくし

て書かれた記事とは思えない。父後朱雀天皇の愛情からくる懸念を描出するものであるが、これが現実となったのが①に引いた卷三十七の卷末記事である。こうして読んでみると、①は続編第一部②③④が描くものと矛盾する内容ではなからう。①を後人の付加と考える必然はないようにも思われる。

ともあれ、①が本来の記事でなかったとしても、他の記事によつて、禎子・尊仁の母子と対立する頼通という構図が続編第一部に認められることは疑いない。こうしてみると、続編第一部と、富岡本の改修箇所の記事傾向は大きく隔たるものと言えるのである。

二 続編第二部の検討

次に、続編第二部の叙述に目を移すが、第二部冒頭は、第一部末尾からはば九三年が経過した時点から書き始められていて、後三条天皇（東宮尊仁）即位などのかなり重要な出来事の記事を欠く。他方、後三条天皇は源基子を寵愛し、実仁親王が誕生するが、それに関する記事はかなり長大である。

⑨ 卷三十八〔五〕「基子の幸い」

後冷泉院にかやうの事おはしまさしかは、またみこおはしまさすとも、うけはりてかくはもてなさせ給はさらまし人しれす、さる人おはしますなりなとはかりこそはきかせ給はまし。か。うちの関白殿に、は、かり申させ給はては、ありなましや。……中／＼東宮には殿、ゆるして、たてな

とはしもやしたてまつらせ給はまし。かく心のまゝに世をひ、かしては、えもてなさせ給はさらまし。

後冷泉天皇の御代であつたならば、「うちの関白殿」すなわち頼通に遠慮して、撰関家と縁故関係のない女性から誕生した皇子をここまで大切に扱うことは不可能であつただろうとの評が記される。往時の頼通の影響力の強さが確認されているのだが、繰り返される反実仮想によつて、それは第二部の時代を描く上での比較の材料として持ち出されていることが明らかに窺えるものである。

このように頼通のかつての力をしのばせる記事は、他にも指摘できる。

⑩ 卷三十八〔六〕「後冷泉院と後三条帝の治世の相違」

後冷泉院は、なに事もた、殿にまかせ申させ給へりき。のちの世にこそ宇治にこもりゐさせ給て、よもしらしものなとも奏せしとて、世をすてたるやうにておはしまししか。されと除目あらんとては、まつなにも申させ給。奏せさせ給はねと、かの殿、人に受領にてもた、のつかさにても、よき所はなさせ給き。

①の卷三十七末尾記事では、後冷泉天皇の御代の末には、「殿」頼通は宇治に籠もつて政治に携わらなかつたと記されていた。だが、それでも頼通は除目の相談に与り、また頼通の家人には受領でも京官でも恵まれた待遇がなされたとするのが⑩である。政治の表舞台から身を引いたかに描かれる頼通であるものの、やはり隠然とした力を維持したことが記されるが、ここも実は

⑨と同様で、後冷泉天皇の御代の頼通は、後三条天皇の比較の対象として機能するに過ぎない。むしろ記事の重心は後三条天皇であり、「この内の御心いとすくよかに」と書かれ、「世人おち申たることはなり」と畏敬されたとの叙述が続くかたちとなっている。

次に頼通の後宮政策について見てみると、第二部は第一部の記載を部分的に改めて描いていることに気づかされる。

⑪ 卷三十八〔五〕「基子の幸い」(⑨の続き)

うち殿のこ中宮をまいらせたまつらせ給へりしに、女院はやかていらせ給はて、やませ給にき。人の御もてなしにや、わか御心といらせ給はさりしにや。

これは先に見た②卷三十四〔二〕に対応するもので、頼通が、「こ中宮」すなわち故中宮＝姫子を後朱雀天皇に入内・立后させたため、「女院」＝禎子が自らの意志で宮中に参内しなくなったと回想する。ところが⑪は、傍線部で②と同様のことを書きつつも、かつ二重傍線部で禎子不参内の原因が頼通の「御もてなしにや」との別の解釈も示している点が注目されよう。

⑫ 卷三十八〔五〕「基子の幸い」(⑪の続き)

この殿は四条宮まいらせ給へりしかと、中宮の御事をは所をきまいらせさせ給て、ものを御覧するにも、まつあの御かたの事をと、おほしをきてさせ給へり。女院のおほしめさん事もあり、人よこさまにまいらせ給、こ院の御事もあれは、さこそはあるべき事なれと……

また⑫の傍線部も、⑦卷三十六〔四五〕に対応した記載である。

⑦は、後冷泉天皇には「中宮」＝章子内親王がいるにもかかわらず、頼通は「四条宮」＝寛子を入内させ、皇后宮としたものの、章子をまず第一とし大切にお世話した、という頼通称賛記事であった。これは⑫の傍線部とほぼ同一の内容と言つてよい。ただし、⑫はそれに続けて二重傍線部で、頼通が寛子を入内させたのは、やはり道理に叶わないものであったとも記す。そして、後冷泉天皇の祖母でもあり、章子内親王の伯母にもあたる「女院」＝彰子や、章子内親王の亡き父「こ院」＝後一条院の思いを汲むなら、頼通が章子内親王の後見を疎かにしないのは、当然そうすべきものであるのだが、とのやや辛口の評価を書き加えているのである。

つまり第二部の⑪⑫には、第一部にはなかった頼通への軽い批判が付加されてくると見なしてよいだろう。先の⑨⑩も合わせて考えれば、頼通は第二部においては相対化されて描出されてくると言える。第二部は、物語中での頼通の位置づけを新たにし直しているのである。^(注4)

なお「位置づけのし直し」という点では、頼通から関白を讓られて、治暦四年(一〇六八)～承保二年(一〇七五)の間その任にあたつた教通に関しても以下の記事がある。

⑬ 卷三十九〔二〇〕「教通薨去、師実、関白となる」

一院いとあさやかにすく／＼しく、人にしたかはせ給へき御心にもおはしまさ、りしかは、関白殿もえ御心にもまかせさせ給はすなとありしかと、すゑになるま、には御なからあよくおはしまして、御心ちのほととさふらはせ給

ひ、たちさらせ給をりは、たつね申させ給ける。

頼通の同母弟である教通は、後三条天皇そしてその皇子・白河天皇の御代に関白を務め、「一院」＝後三条院とは当初、不協和音もあつたものの、やがては良好な関係を築くことができたことが、一つの記事の中に描かれる。これは第一部に対し第二部において「位置づけのし直し」がなされる頼通の場合とはいささか状況が異なっている。後三条院と摂関家の間は、大きな流れで言えば、懸隔の時代（父・頼通）↓融和の時代（子・師実）と推移するのであるが、教通の時代はその両者の過渡期にあたっていたさ^⑬が象徴的に現れているように。

第二部は、教通から関白、氏の長者を譲り受けた師実が、後三条天皇・白河天皇と新たな紐帯を結びつつ繁栄するさまを主たる話題としている。それに対しては、「現在を末勝りの昔に劣らない世とも見ている」とする評価もなされるところである。そうした執筆方向の中では、それに伴って、一つの物語描写のあり方が当然ながら生じてくる。それは、師実が父・頼通や叔父・教通を凌駕した存在であるとして描き出す方法である。摂関家嫡流の師実の現在の地位が安泰であれば、過去に起こった頼通と尊仁親王（＝後三条天皇）および母後の禎子内親王との軋轢などを少しばかり描写しても、それはむしろ現在の摂関家嫡流の師実の卓越をこそ称賛する意味合いを持つことになり、大きな問題となることはなくなる。これにあたるのが本章で見てきた⑪⑫ではないだろうか。

しかし、その裏返しのような今一つの物語展開も想定し得る

だろう。頼通の描写などの中に、やや不穏当な記事を含む続編を切り離し、かつ正編に少し手を加えるという物語の書き換えの方向であり、富岡本の改修はそれにあたるものと言える。このように考えれば、第二部編集と富岡本改修は、さほど遠くない時期においてなされたとも思量されてくる。

三 「北政所」の語の検討

ここで一度、視点を変えてみたい。富岡本の改修で目につくものの一つが「北政所」の語の多用である。^{（注15）}『栄花物語』では梅沢本をはじめとする諸本において、正編の三十巻で「北政所」の語は使用されていないが、そこに富岡本は改修を加え、全部で四十三例の「北政所」が用いられることになった。なお参考までに言えば、富岡本にはない続編では、三例の「北政所」の語が使用される。これらは卷三十三・三十四・三十六に一例ずつ見られ、いずれも第一部ということになる。

富岡本の「北政所」の使用状況は以下である。^{（注16）}

指し示す人物		改修の方法		用例数
倫子	増補	書き換え	増補	21例
	増補	書き換え	増補	4例
隆姫	増補	書き換え	増補	6例
	増補	書き換え	増補	8例
明子	増補	書き換え	増補	3例
	増補	書き換え	増補	0例
倫子と隆姫 （「北政所たち」とする）	増補	書き換え	増補	0例
	増補	書き換え	増補	1例

こうした富岡本の「北政所」の使用で特徴的であると思われることが二点あった。その第一は、序列意識からもたらされる「北政所」の語の使用である。

① 卷十七「四」「三后はじめ女性たちの参集」

梅本 皇太后宮、中宮の女房、みなひんかしのらうに……

南のらうには関白殿のうへおはします。

富本 大宮、くわうたいこく、中宮の女はう、東宮の女御、

北政所の御かたくのみなひんかしのかたに……みなみのらうに関白殿北政所おはします。

法成寺金堂供養の前夜に参集した道長一門の女性たちを描くこの箇所で、富岡本は一つ目の二重傍線部で道長の正室・倫子を「北政所」として増補し、二つ目の二重傍線部で頼通の正室・隆姫を「北政所」と書き換える。その他にも波線部の増補も行われ、道長一門の女性を網羅的に、かつ身分序列に則って数え上げるような改修が富岡本ではなされることがわかる。

② 卷十七「五」「女房たちの装束」

梅本 との、うへの御方おとりけなし。これのみならず院

の御方、関白殿、内大臣殿などの御かたくいみしくせさせ給へり。

富本 北政所の御かたのすこしもおとらず。院の女御の御

方、関白北政所の御方、内大臣との、御かたなどすへていみしくあさましきまでせさせ給へり。

これは①の続きで、富岡本は一つ目の二重傍線部で倫子を「北政所」と書き換え、二つ目の二重傍線部で隆姫を「北政所」と

して増補している。また、波線部のような増補も行われ、「院」
「小一条院の女房ではなく、「院の女御」
「寛子（道長女）の女房として、書き換えられている。

網羅的に道長一門の女性を列挙する場合、道長女の彰子・妍子・威子・嬉子・寛子らは後の身分の公的な呼称となるが、それに対応するものとして、倫子や隆姫に「北政所」が使われたと考えることができるのである。

また、富岡本の「北政所」使用の特徴の第二として、道長の室の明子にも三例ではあるが「北政所」の語が用いられることが挙げられる。

③ 卷十六「二〇」「倫子の出家」

梅本 しはしありて、たかまつとの、上もならせ給にし：

富本 しはしありて、たかまつ殿北政所もならせ給にし：

鷹司殿と呼ばれる倫子が出家した後、「たかまつ殿」
「明子も出家した」という記事であるが、本来、明子は「北政所」と呼ばれる立場ではなく、いささか不審の改修であった。しかし、倫子と明子を並列したため、明子にもその呼称が適用されたと考えることはできるのであり、その仮説は以下の記事でより説得的となる。

④ 卷十六「二三」「長家室の葬送」

梅本 中将のきみの御うしろめたさに、みたうよりも、た

かまつとのよりも、しきりに御せうそくあり。

富本

中将の君の御うしろめたさに、内春宮院後の宮くなど、みたうよりも、たかつかさとの、北政所、た

かまつとの、北政所よりも、しきりに御せうそくあり。

長家は明子腹であるが、倫子の猶子となっている。その室が亡くなった際の弔問記事であり、富岡本では波線部で道長の血を引く高貴な方々からの弔問があったことも付加されている。また、二重傍線部のように倫子を「北政所」として増補して明子の前に置き、明子も「北政所」と呼んでこれに続けている。これも、やはり序列意識に基づく富岡本の改修と言える。

ただし、富岡本にあるもう一箇所の「北政所」は上述の③④の二箇所とは同質とは考えにくい。

⑤ 卷十（一九）「道長、顕信と対面」

梅本 まつとの、うへなくく御そのこといそかせ給。

富本 たか松との、北政所なくく御その事いそかせ給。

明子腹の顕信が突然出家を遂げ、道長が比叡山に赴き対面、その後、母の明子が僧衣などを整えるという場面であるが、富岡本は明子を二重傍線部のように書き換えている。その意図については、考えあぐねるところである。

このように富岡本の改修で多用されることになった「北政所」の語については、服藤早苗氏の研究が詳しい。^{（注18）} 服藤氏は「北政所」の初期の用例は、公卿クラスの妻を呼ぶ「北の方」の家政機関「政所」をさすと見なし、例えば『源氏物語』「若菜上」（二二）の「北の政所の別当ども、人々ひきあて、祿の唐櫃によりて、一つづつ取りて、次々賜ふ」^{（注19）}の用例などもこれにあたるとする。一方、撰関の妻を「北政所」と呼ぶ初例としては、『定家記』

天喜元年（一〇五三）六月二十八日条において頼通の正室隆姫をさすものを提示する。そして、後者の用法は十一世紀末に固定したと考えられるとしている。

この服藤氏の調査を踏まえてみれば、富岡本において「北政所」の語を多用し、かつそれが主に倫子・隆姫をさすという改修がなされた時期は、十一世紀中頃以降よりは、その用法が定着した十一世紀末以降と考える方が自然であると考えられる。これは二章で考察したように、まさしく続編第二部の成立時期と重なっている。

さらには、道長の正室・倫子のみならず、③④⑤のごとく次妻の明子をも「北政所」と呼ぶのは、富岡本のみではないことも看過できない。『大鏡』道長伝（一七〇）に「この北の政所の二人ながら源氏におはしませば、末の世の源氏の栄えたまふべきと定め申すなり」とあり、倫子・明子を並記して「北政所」と呼んでいて、③④と共通するところがある。富岡本には、他に卷四に『大鏡』を参照したか、もしくは『大鏡』と共通の資料を用いたか、どちらとも考え得る改修箇所があるのであり、この「北政所」の用い方も同様に考えることができる。特に『大鏡』を参考資料としたのであれば、院政期に富岡本の改修時期を求めるのが妥当となつてこよう。

四 富岡本の改修を支えたもの

以上、三章にわたつての検討の結果、富岡本の改修期として

は、概ね続編第二部が書かれた寛治六年（一〇九二）以降の院政期が想定されてくるのである。ちなみにここで言う院政期は、白河天皇がその皇子である八歳の善仁親王に譲位して堀河天皇が誕生し、かつ上皇が院庁で政務をみることとなった応徳三年（一〇八六）をその始まりとする通説によっている。それでは当該期の歴史的状况を確認しつつ、富岡本改修の背景を考えてみる。

摂関期から院政期の変化については、日本史の分野において分厚い研究史が積み上げられてきているが、近年、上島亨氏（^{注23}）樋口健太郎氏（^{注24}）らが新たな視点からその問題に切り込んでいる。

道長は寛仁四年（一〇二〇）法成寺（当初は無量寿院）を建立し、「氏寺」とするが、その仏事に諷誦料を出すものが親族集団、すなわち一門と見なされ、そこには道長の子女のみならず、彼の血を引く天皇・皇族も含まれていた。それは道長の死後の天喜六年（一〇五八）に法成寺が全焼し、翌年に頼通によって阿弥陀堂が再建された時点においても、同様の状況であった。しかし、白河天皇が承暦元年（一〇七七）法勝寺を建立し、王家の「氏寺」として後は、摂関期には法成寺で営まれることが多かった天皇・皇族・后妃などの仏事は法勝寺に場を移すこととなり、法成寺は摂関家のみの仏事を行う氏寺となっていた。しかも、法成寺の仏事に諷誦料を出すのは摂関家嫡流に限定されて、庶流一門は外されてゆく――以上が樋口氏の研究で指摘されている、注目すべき大きな変化である（^{注24}）。

さらにこの変化は、院政期、道長のご事や先例を特権的に享

受・継承していった摂関家嫡流が道長の後継者としての立場を確立してゆくとされる動きと歩みを一つにしているものとも言えよう（^{注25}）。

なお、二章で⑬として引用した卷三十九（二〇）「教通薨去、師実、関白となる」は、白河天皇の御代、承保二年（一〇七五）記事であり、⑬の前には関白譲渡の経緯が以下のように描かれる。

内大殿にゆつりたてまつらまほしくおほしめしめと、
宇治関白殿の譲たてまつらせ給し御心をおほしめせは、いかてかは。又さりとて、うちの御けしきなどのさるへきにもあらず。……御心いとなたらかによくおほしましけり。

教通は、関白を自身の男である「内大殿」＝信長に譲りたかつたものの、兄頼通が治暦四年（一〇六八）にその男の師実でなく、弟の自分に関白を委譲してくれたことを思い起こし、また白河天皇の意向も無視できないことから、師実に譲ったとするものである。結びは、教通の人柄のよさを褒め称えているのだが、この後、摂関の座は教通の子弟をはじめとする庶流に渡ることとはなかったものであり、『栄花物語』続編第二部も史実の大きな変化をその立場なりに書き留めていたのであった（^{注26}）。

富岡本の増補は、道長と頼通に関する記載において多く行われ、かつ道長の政治的基盤を受け継いだ頼通を称揚し、その一方で道長・頼通と繋がりが薄い人物の描写を削除する傾向にあった。つまり、富岡本は摂関家嫡流の優位あるいは存在意義をことさらに再確認する性格をもつものと言ってよい。すなわち

富岡本の改修は、院政期に見られる撰閲家の実態に対応したものとするのが蓋然性が高い、と稿者は考えるのである。

おわりに

歴史物語は、ひとたび成立後、読み手によって史実の考証がなされつつ享受されるという特徴をもつ。むしろ『源氏物語』のような作り物語においても同様の側面があることは事実であるが、その考証がより細密となるのはやはり歴史物語の方であろう。

時代は下るが、鎌倉時代の宮廷を描き、南北朝期に成立した歴史物語『増鏡』に関しても、原型であると思われる十七巻本に対し、それを大きく増補・改修した十九巻本が作られている^(注2)。自身のもつ資料を反映させて記事を書き改めたい、自身の関心が強い場面を増補したいという享受者の欲求が改修本を生むのである。それは、歴史を自身の立脚する視点から捉え直すという試みであるとみなせる。

富岡本は、撰閲家の道長・頼通周辺を増補し、かつまたそれに疎遠なものを削除・改変することで、撰閲家嫡流を従前以上に称揚しようとした改修本である。他方、鎌倉時代を射程に入れると『古事談』『続古事談』が平安時代の撰閲家の逸話を少なからず書き残し、また慈円の『愚管抄』も皇室と撰閲家の深い関わりを滔々と論及してゆく。これらはいずれも撰閲家嫡流の地位が完全に固定化した後に過去を物語る著作であるが、こ

れらを読んだ目で富岡本『栄花物語』を眺めるとき、富岡本の改修は、分量的にはわずかではあるものの、その嚆矢たる性格を有することが浮かび上がってくるのである。

注

(1) 「注という異言語―書き込まれた学習院本『栄花物語』姫子女王逸話―」(『日本文学』六〇巻五号、二〇一一年五月)、「学習院大学文学部日本語日本文学科所蔵『栄花物語』の本文―その性格と価値―」(『中古文学』八九号、二〇一二年六月)、『栄花物語』巻二七本文の再検討―学習院大学文学部日本語日本文学科所蔵本と伝二条為明筆六半切二葉・小林正直旧蔵本をめぐって―」(『教育と研究 早稲田大学本庄高等学院研究紀要』三二号、二〇一四年三月)。

(2) 久保木秀夫『『栄花物語』主要伝本類概説』(『王朝歴史物語史の構想と展望』新典社、二〇一五年)。加藤静子『『栄花物語』の続編の本文―学習院大学日本語日本文学科所蔵本から―』(『都留文科大学大学院紀要』一九集、二〇一五年三月)。

(3) 松村博司『『栄花物語』の研究』(刀江書院、一九五六年)第一篇第三章。

(4) 拙稿『『栄花物語』富岡本増補記事の検討―巻二十七―三十に着目して―』(『日本文学』六三巻六号、二〇一四年六月)。

(5) 拙稿『『栄花物語』富岡本の改修方向』(『国語国文』八五

卷、二〇一六年四月。

(6) 注(3)と同。

(7) 注(4)と同。

(8) 『栄花物語』本文再考―西本願寺本を中心とする―(『中古文学』八〇号、二〇〇七年十二月)、『栄花物語』梅沢本と西本願寺本 付、足利將軍家の蔵書(『研究と資料』六〇輯、二〇〇八年十二月)。

(9) 梅沢本の引用は、川口久雄解説『梅沢本栄花物語』(勉誠社、一九七九・八二年)により、私に句読点、傍線、鉤括弧などを補った。また検索の便宜を考え、新編日本古典文学全集『栄花物語』(小学館)の章段番号を示した。

(10) 『栄花物語』続編の歴史叙述(『国語と国文学』九三卷二号、二〇一六年二月)。

(11) 注(2) 加藤論文。

(12) ただし例外もあり、近い時代では白河天皇の御代にその皇女で、母は中宮賢子(撰関家師実の猶子)の媼子内親王も卜定されている。

(13) なお加藤静子氏は、続編第一部と第二部の執筆時期を二つに分けて考えず、「続編全体が同地点から歴史構想された、と考える方がより自然ではないかと思われる」とされる(『栄花物語』続編考―避表現と人物呼称から―)(『王朝歴史物語の方法と享受』竹林舎、二〇一一年、初出は二〇〇七年)。人物呼称を詳細に分析した説得力のある論考であり、その場合には、⑪⑫記事は、一旦執筆した頼通に関する前の

記事を後の巻で自ら吟味し、物語現在の認識で捉え直しをし、と考える必要が出てくる。

(14) 『日本古典文学大辞典』第一卷(岩波書店、一九八三年)の『栄花物語』解説。

(15) 北政所については、松村博司『栄花物語の研究 補説篇』(風間書房、一九八九年)にⅡ―六「北の政所考」の論がある(初出は一九八五年)。

(16) 富岡本の引用は、富岡甲本(富岡家旧蔵、現在個人蔵、四日市市立博物館寄託、重要文化財)を写真撮影した東京大学史料編纂所蔵のレクチグラフの複写により、私に句読点、傍線などを補った。

(17) 富岡本が「たか松との、」とする箇所を、梅沢本も西本願寺本も「まつとの、」としている。

(18) 『平安朝の家と女性―北政所の成立―』(平凡社、一九九七年)第二章。

(19) 引用は新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)による。

(20) 引用は新編日本古典文学全集『大鏡』(小学館)による。

(21) 卷四(二)「花山院の所々巡歴」の記事である。注(5)拙稿に⑥として言及した。

(22) 『日本中世社会の形成と王権』(名古屋大学出版会、二〇一〇年)。

(23) 『中世撰関家の家と権力』(校倉書房、二〇一一年)。

(24) 注(23) 著書の第一部第一章(初出は二〇〇四年)。

(25) 末松剛『平安宮廷の儀礼文化』（吉川弘文館、二〇一〇年）
第二章第五章（初出は一九九九年）。

(26) 『古事談』巻二―一二話では、教通は男の信長に閨白を譲ろうとし、それに悲歎した師実が出家を考えるものの、白河中宮の賢子（師実猶子）がそれを白河天皇に伝えた結果、閨白は師実に定まったとする。『栄花物語』の記す、うつくしい逸話とは異なる伝承の存在が明らかになるが、いずれにせよ、教通の後には撰関が庶流に伝わらなかったことを書き残すものである。

(27) 十九巻本系の最も古い写本は、尊経閣文庫蔵の後崇光院自筆本であり、室町初期（十五世紀前半）写である。井上宗雄氏は『増鏡 全訳注（下）』講談社学術文庫、一九八三年の解説において、「流布本（十九巻本をさす：稿者注）が増補本であったとしても、その「増補」は、『増鏡』成立後、一世紀を経ないうちに行われていると見てよく、見方によっては、推敲または追記によって生じた異本程度の関係かもしれない、流布本はおおいに尊重して然るべきものである」とし、その重要性を強調する。詳しくは、拙著『中世宮廷物語文学の研究―歴史との往還―』（和泉書院、二〇一〇年）第一部第四章を参照されたい。

【附記】 本稿をなすにあつて、貴重な書籍の引用をお許しくださった富岡甲本の所蔵者様とその寄託先である四日市市立博物館に、御礼申し上げます。なお本稿は、JSPS科研費・

基盤研究（C）『「栄花物語」本文の変容と再構築についての研究』（課題番号二五三七〇二一九）による研究成果の一部である。

（こじま あきこ・本学教員）